

GR
白雲軒

玉
華
門

と
り
お



55

埼玉 名栗

昭和58年11月17日

宗教法人 鳥居観音
白雲山

表紙解説

玉華門

山腹に玄奘三蔵塔が建てられたのを機として、緑り多い支那門を造立したもので、昭和四十四年春の落慶。

「玉華門」は、曹洞宗管長、高階瓏仙禪師のご命名。その昔、玄奘法師が中国から印度に経文を受けに行かれた時、十四年間の永い道中の千魔万怪を克服して、終に印度に入られた最初の地が玉華州であり、中国に帰国後多くさんの訳経を終えて静かに臨終を迎えられたのが玉華寺でありました。

扁額の御文字は、禪師の絶筆となりました。

門の鬼瓦の特殊な造形は、凡て開祖平沼彌太郎先生の塑像によるもので、わが国では珍しい建物でございます。

鉄筋コンクリート造り 高さ十一米。

昭和四十四年四月十七日落慶。



切り取ってご使用ください。

バ トウ カン ノン
馬 頭 観 音

説 解 絵 口

馬頭観音

鳥居観音のご本堂に祀つられている七観音の内の一尊像で「馬頭観音」さまと申されます。

畜生道の尊とされ、宝馬の天を馳けるが如く、一切の魔や、障害物を追い払うといわれます。

こうした信仰から山裾や村境いなどに石彫りのものを見かけますが、お寺に安置されているものは珍らしく、鳥居観音の他には、秩父下影森の橋立寺と西国霊場に一ヶ所あるだけといわれます。

鳥居観音開祖平沼彌太郎先生作

昭和三十三年祭祀

裏山の大検での一本彫り、総高一、五米

とりる 目 次 第55号

裏表紙	これからの行事								
裏表紙裏	寺域案内図								
表紙	①玉華門								
表紙裏	②表紙解説								
口絵	③本堂に祭祀の「馬頭観音」								
口絵裏	④口絵解説								
流	燈	法	要	鳥居観音	尾尻	天外	二		
道光禪師ご法話	(其三七)						四		
禅のはなし	(其五)			大本山総持寺 元副監院	佐藤	俊明	八		
西遊記	(其四八)						十二		
一万体観音奉安者報告							十六		
写経奉納者報告							十七		
観音さまのお救い				渋谷区	有末	文江	十七		
鳥居観音詣で				飯能市	岡	治代	十八		
鳥居観音だより							二十		

流 灯 法 要

(八月十七日)

鳥 居 観 音

尾 尻 天 外

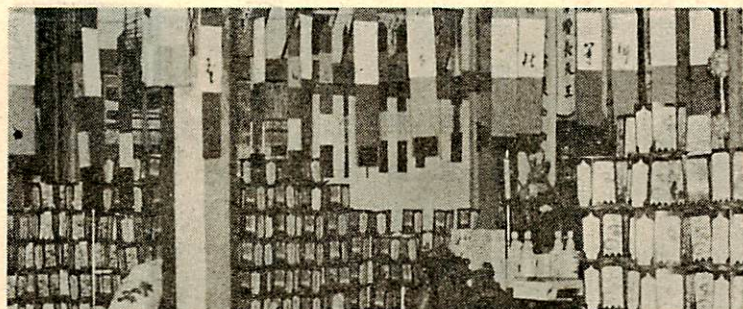
氣遣われた数日來の台風模様が、生憎と近くに上陸となつて終日きびしい荒しとなりました。参拝の団体バスも大半が中止を余儀なくされて、信者の方々には大変ご迷惑をおかけしたことでした。

法要は定刻午後四時半、須弥壇にお供えされた千数百の色とりどりの精霊舟、天井に吊された五色の施餓鬼幡に囲まれて、満堂のお施主と共に懇懃に営まれました。

「灯笼流し」の行事は、古くからのわが国でのお盆の習わしで、お盆に戻っておられたご先祖さまを、供物や飾りものに乗せて、ご一緒に浄土にお帰りいただくという報恩のご供養ですが、今生にわが身を享けている私共として、親に孝養を尽すはもとより、目に見えない先亡の霊に心をたむけるということは、何にかえない大切なこととございます。

観音さまがその額に阿弥陀さまの像を戴だかれて、常にその仏恩を仰いでおられるお姿は、私共に報恩の尊さを論ざれてのこととございます。

又修証義という経文の中には「今吾等宿善の助くるによりて已に受け難き人身を享けたるのみならず、遇い難き仏



流 灯 法 要

法に値い奉れり、生死の中の善生最勝の生なるべし」とのお示しもございます。私共が両親から生が享けられたことは、数百億分の一という希少な確率であるといわれ、両親は又祖父父母の四人の中から……と同じような尊いご縁が頂戴出来てのことでございます。

遠くご先祖さまを遡ってまいりますと、十五代前には、三万二千七百六十八人という大勢の先祖さまがおられ、三十代で十億人を超え、四十代では一兆と……想像を越える方々の持ち継がれたご縁によってこそ今日のわが身であることを思いますと、言葉には尽せない有りがたい貴いことと、只々感謝しないではおれません。

又このような多くさんの中で若しお一人でも欠けておられたら、現在の自分の存在はなかったことを考えますと、つくづく「最勝の生なるべし」と心に銘じないではおれません。

合 掌

む。また滅罪清浄ならしむなり」

という一節があります。三時の悪業報というのは、これは因果のお話をくわしく申さなければ意味がよく通じませんが、仏教の説では、因果のむくいてくる果報とそれから今生でなしたことに對して、すでに今生でむくいてくる果報と、今生でなしたことが来世にいたってむくいてくる果報と、それからその後の生にいたって、いつか一度はかならずむくいてくるとしてあります。それを三時の悪業報といいますが、もちろんそれは善悪業とも同じであります。ゆえに因果の道理からいけば、かならず業のために、しばられるにはきまっていますけれども、懺悔をすれば、その悪業報を消滅することができるといいます。ところが法のおといたるところであります。ところが世間の人は、現在悪いことをして、現在にわるい報いがくれば、なるほど、あれだけのわるいことをしたのであるから、あのくらしいのことはあたり前だといえます。けれども善根は積んでも、善いむくいがこなかったり、悪いことをしている者が、しあわせを得

たりしますと、調子がちがうから、なんだかわからなくなつて、因果をうたがいます。けれども、それは今いう三時の業報の道理がわからないからであります。一たんなしたことは、おそかれ早かれかならずむくいてくるにきまっていますから、

「造悪の者はおち、修善のものはのぼる、毫釐もたがわざるなり」

と申してありまして、鶉の毛で突いたほども、原因に對する結果に違算はないのであります。それで行ないをそのままに、ほかしておけば、そのままでもくいてくるにきまっておりますが、懺悔の法力は、それを清浄にする功德力があります。それではその懺悔はいつたい、どのような心からおこってくるのかといえますと、いままでなしたことは、なるほど罪悪ばかりであった、悪かったということを、反省するのが第一であります。過去の悪かったこと、したがって果報のこわいことに気がついたならば、将来はかならず、つつしまなければならぬという考えが、自然に心からわいてきて、いままでいっこう

に気がつかないで、物のいのちをとったり、その他為してきたあらゆることは、いかにも悪かった、さきがおそろしいから、今後はいっさいいたしません。どうぞ今までの罪は、いっさい清浄にしていただきたいと、法によって心からあやまる。それが懺悔であります。それで、この懺悔という二字は、インドのものことばでは懺摩といい、支那（中国）のことばになおすと悔過、すなわち過ちを悔いるということになりますから、原語の懺の字と、意識の悔過の悔の字とをあわせて懺悔というのであります。

そして懺の字の方には、将来をつつしむという、また悔の字の方には、過去のことを後悔してあらためるといふ、この二つの意味がふくまれています。ともかくも今までの悪かったことに気がつけば、つつしむということになるのは当然であります。さればとて、懺悔すれば清浄になるから、悪いことをするだけしておいて、一度に懺悔したらよからうというのでは懺悔になりません。ああ悪いことをした

と、ほんとう恥かしくおそろしくなつてこなくてはなりません。そうしてそこに自然すくわれたいという希望、すなわち宗教心がおこつてまいります。

彼の熊谷直実が自分のかわいい一子小次郎の首を敦盛の代りに斬つたので、はじめて修羅の巷の夢がさめた。そこで義経からむりにお暇をいただいで、とうとう発心して、宗教の人となつてしまつたように、かように過去のこと気がついて、将来ふたたびせぬという考えが、心の中から起れば、それがいわゆる発心でありまして、そこへかならず懺悔心がともなつてくるのであります。そして至心に懺悔したあかつきには、ちょうど百年の暗室といつて、人もはいつたことのない、蝙蝠ばかりいるような暗窟に、ローソク一本つけると、それはどの暗黒も一時に消えてあかるくなるように、今までは罪悪をもつて闇黒にとざされていたおたがいが、ひとたび懺悔のともしびを点ずれば、それでもつて業障海からすくわれるという。こういうけつこうな法門があるのに、なぜ早くこの門に、は入つてこないのか、懺

悔をしないのかと、仏も祖師もあわれんで、おすすめくださっています。そうした暗い心が明るく、罪の世界が清くなる。そうすれば、そこにどういう光明がさしてくるかといえば、同じく修証義に、

「この功德よく無礙の淨信精進を生長せしむるなり」

と申してあります。無礙の淨信というのは、清淨無垢の信念ということでありまして、すなわち懺悔をする心の底から起こってくる信念であります。それはどういうわけかといえ、おたがいの罪惡の心の奥には、実相真如の仏性というりっぱな珠がひそんでいるからであります。それが罪のために覆われているから、光が出ることができませんけれども、一念発起して至心にさんげするときは、そのうわべの罪障が消散して、真実仏心の光明が信念となつてあらわれます。それを無礙の淨信といえます。無礙とは障りのないことで、四方八方に通達自在であることをいふのであります。それは仏心があるからであります。それが無縁の人の大悲とって、い

ずれの方面でも、平等一ように及んでくるのであります。おたがいでもその靈妙なる無礙の淨信が、あらわれるときには、仏と同じく平等の慈悲心がうごきますから、また修証義に、

「その利益 普く情 非情に蒙むらしむ」

と申してあります。情とは情識を有するもの、非情とは情識のない草木のごときものにまで、慈悲の情が及ぶということでもあります。

そういうりっぱな貴い心が、おたがいにありますから、なぜ、それをおこさないかと、仏祖（お釈迦さまや、祖師）のすすめを、いただいている次第であります。

禅のはなし

其五

名人の正しく

名人なるとき

吉川英治の『宮本武蔵』を読んだのは、はや四十年も前の学生のころだった。

こんな場面があった——吉岡伝七郎が柳生石舟斎のところに試合を求めていった。すでに老境にはいつていた石舟斎は、お通おとにしゃくやくの花一枝を持たせて伝七郎の宿舎を訪れさせ、石舟斎は風邪で休んでいるから、といって婉曲に試合を断わらせた。

武者の伝七郎は、ひとをバカにしている、と行って、お通が置いて行ったしゃくやくの花を投



大本山総持寺

元副監院 佐藤俊明



げ捨てる。それを城太郎が拾い上げ、同じ目的で柳生の里に來ている武蔵に渡す。

武蔵は、しゃくやくの切り口をみてホトホト感心し、自らも小柄こぶらで切って、その切り口を比較してみるが遠く及ばないことを知っていよいよ歎息する。

ここまではいい話だが、そのあとはいただけな



い（読ませる小説だから止むを得ないが）お通は館に帰って、伝七郎に会った状況を報告する。石舟斎は「しゃくやくの花は渡したか」「切り口は見せたか」とたずねる。これではせっかくの石舟斎も死んでしまふ。

諸仏のまさしく諸仏なるときは、自己は諸仏なりと覚知することをもちあらず、しかあれども証仏な

り、仏を証してもゆく(正法眼蔵・現成公案)

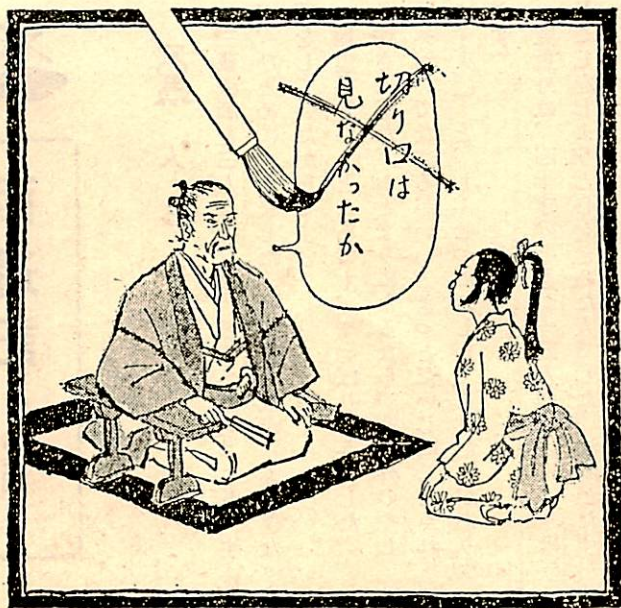
仏が真に仏であるときは、オレは仏だなどと考えるものではない。オレは仏だなどと思つてゐるときは、仏としての自分と、自分を見てゐるいま一つの自分とに、自己が二つに分裂してゐる。これでは仏ならざる不純物が混入してゐることになるから、ほんものの、真正正銘の仏ではない。ほんものはあくまでも純粹でなければならぬ。

「金糸を断ずれば断々ことごとくこれ金」という。金の延べ棒はいくら細かに切断しても金である。純粋度にはなんらかわりはない。同様に、自己のどこをとつてみても仏であるのが真の仏である。自分自らを仏と思わなくとも、それがほんとうの仏であれば、仏であることが如実に顕現されるものである。真の仏は、自分を仏と認めなくとも、仏として常に自己を顕現してゆくものである。それを、「しかあれども証仏なり、仏を証してもて



ゆく」という。

柳生石舟斎が真に名人であるなら、自らは名人だなどと意識するはずがない。いわんや、自分の切ったしゃく



やくの切り口がすばらしいものだなどと心に
 思う道理がない。したがって「切り口はみな
 かったか」などという言葉の出るわけもな
 い。しかしながら、それでいて、真の名人で
 あるならば、ごくあたり前に無意識のうちに
 チョキンチョコキン切っても、武蔵のような、
 見る人が見れば歎息これを久しうするほどの
 すばらしい切り口となるのである——「しか
 あれども証仏なり、仏を証しもてゆく」
 このごろは宣伝の世の中で、自らの優秀性
 を自ら意識するだけでなく、他人にもこれを
 押しつけようとする。しかしながら真に優秀
 なものは、自認や宣伝の如何にかかわらず、
 常にその優秀性を遺憾なく發揮するものであ
 る。われわれは、もっともっとほんもののよ
 さを知るべくつとめることによって、にせも
 のにせものたる悪さを見破る眼をこやかに
 くてはなるまい。



西遊記

(其四八)



人ちがい

三蔵法師と三人のてしは、どこへいっても、すぐ、ひとめにつきました。悟空や八戒が、ふしぎな顔をしていたからです。

地霊県というところでも、やっぱりそうでした。「坊さんがた、おとまりになるなら、寇員外のやしきへおいでなざるがいい。きつとだいじにしてくださいよ。」と、しんせつにおしえてくれた人があります。

寇員外は、四十才のとき、一万人の坊さんに、ほどこしをしようと心をきめた人でした。法師がたずねていったときは、九千九百九十六人のほどこしがすみ、一万人に、あと四人というところだったの

で、たいへんよろこびました。

「あなたがたで、ちょうど一万人になります。たくさんごちそういたします。どうぞゆつくりしていただくさい。ここから霊山までは、八百里ですが、馬でおくりしますから、じきにいきます。」

やしきにむかえられて、おかみさんと、ふたりのむすこにも、あいさつをさせました。上のむすこも下のむすこも、顔かたちが寇員外そっくりでした。

法師は、寇員外のやしきに二晩とまって、三日めに、笛やたいこにおくられて、にぎやかにでかけました。これを見ていたのが、そのあたりをあらしまわっていた山賊どもです。

「旅の坊さんを、あれほどだいじにするところをみると、寇員外の家は、よほどの金もちなのだろうな。」と、山賊のかしらがいました。

「そうですとも。寇員外は大金もちというひょうばんです。どうですか。今晚あたりおしいって、ありったけの金銀宝ものを、ぶんどることにしましょうか。」

「おお、それがいい。したくをしる。」

山賊どもは、すぐになかまをあつめました。そして、夜ふけに、寇員外のやしきの門をぶちこわして、どつとあばれこみました。手に手に刀をひらめかし、口ぐちにどなりちらしました。

「金銀をだせ。宝ものをよこせ。てむかうやつは生かしてはおかぬぞ。」

ばたんばたん、雨戸をけたおし、手あたりしだいに、道具などをうちこわしました。

やしきの者はものかげにかくれて、がたがたふるえていましたが、あまりらんぼうがひどいので、主人の寇員外は、こわごわでいって、

「らんぼうはやめてくれ。金銀は持っていくがい。ほしいものはみんなやる。ただ、着物だけ二、三枚おいていってもらいたい。はだかではいられないからな。」

たのむようにいきました。けれども、山賊どもはききません。

「うるさい。ひっこんでおれ。」とわめきながら、

足をあげて、寇員外をけたおしました。

かわいそうに、寇員外は、それっきりおきあがりません。死んでしまったのです。山賊どもは、持てるだけの品物を持って、風のようにひきあげていきました。

主人をころされた、やしきの人びとは、寇員外からだにとりすがって、泣きくずれました。

「それにしても、こんなむごたらしいことをしたやつは、どこのなに者だろう。おとうさんのかたきを、このままにはできない。」と、上のむすこが、まゆ毛をつりあげていえば、

「そうだ。役所へうったえて、かならずとらえて、しかえしをしてもらおう。」と、下のむすこは、身をふるわせて、くやしがりました。

「おまえたちのいうとおりです。おとうさんをころしたわる者は、三蔵法師と三人のです。わたしは、ちゃんと見ていました。」と、おかみさんがいきました。

「えっ。あの法師と、でしですって……。そんなこ

とはないでしょう。あの方がたは、靈山へ経文をとりに行く、とうとい坊さんです。わるいことをするとはかんがえられません。」と、上のむすこは、ほんとうにしませんでした。

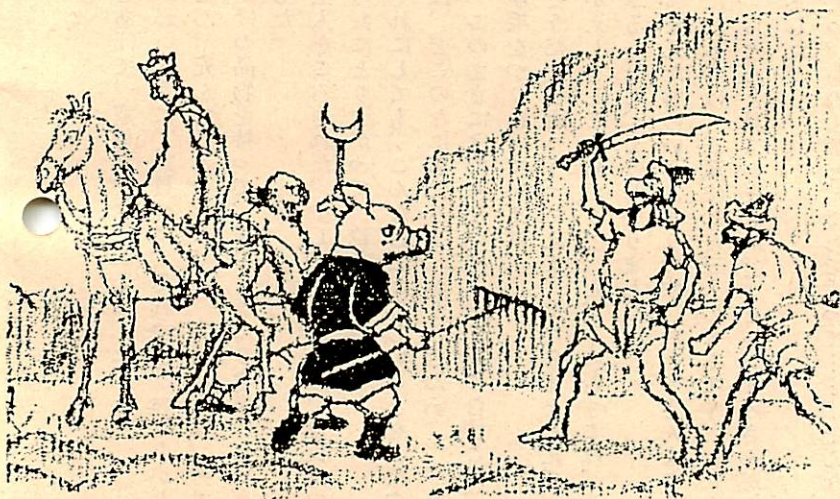
「それは、おまえがだまされているのです。」と、おかみさんは、はらただしげにいました。おかみさんはあまりくやしかったので、法師につきみをきせようとしたのです。

「でも、法師だったというしょうこは、ないのでし
ょう。」

「いいえ、ありますとも。わたしは、たしかに見たのです。あかりを持っていたのが法師で、刀をふりまわしたのが八戒。金銀をはこんだやつは悟淨。おとうさんにらんぼうしたのが悟空です。」

「ほんとうですか。ああ、くやしい。さんねんだ。靈山へいくなどといって、とちゅうからもどつてきたのですね。にくいやつは、あの四人です。役人にうったえましょう。」

ふたりのむすこは、役所へかけつけて、法師たち



をとらえてくださいと、たのみこみました。

「それ、にがすな。」と、百五十人の役人が馬をとばして、法師たちのあとをおいかけました。

そんなことは、ゆめにも知らない法師たちです。とちゅう、ある山をとおりかかると、山賊どもが、

金銀や宝ものをわけているのをみつめました。

「おや、へんな男たちがいる。どうも目つきのわるいやつばかりだな。そうは思わないか。」

悟空が、八戒のかたをつついていきました。山賊のほうでも、法師たちを見つめました。

「法師たちがきたぞ。あいつらは、寇員外の家から、なにかもらってきたにちがいない。ついでに、こちらへまきあげようじゃないか。」

「がつてんだ。しっかりやろうぜ。」

うなずきあつて、道へとびだし、ばらばらつと、法師たちのまわりをとりまきました。

「坊主、まてつ。金銀、宝ものをよこせ。ついでに、着物もおいていけ。」と、山賊のかしらは、大

手をひろげて、とおせんぼをしました。



観音 一万体

奉安者芳名

自 五八・三
至 五八・九
敬称 略

一	三	一	一	一	一	一	一	一	数
新宿区	市東久留米	日高町	日高町	飯能市	狭山市	横浜市	川越市	飯能市	住所
米川 梅吉	高橋 芳美	小谷 憲成	中沢 弘一	和田 侑子	細田 直治	星野 清	関本 正一	竹田重次郎	芳名
一	一	二	一	一	一	一	一	一	数
豊島区	入間市	川口市	新宿区	板橋区	茅ヶ崎市	所沢市	小金井市	新座市	住所
安部 辰也	佐々木よし	藤本 良吉	芳野 和子	森 惠美子	片岡 祥子	西村 安夫	吉田 竹利	小池富士雄	芳名
奉安数 一〇、〇四九体		総合計 施主 四、〇三六名		本表計 施主 二三名		一 保谷市		数 住所 芳名	
奉安数 一〇、〇四九体		総合計 施主 四、〇三六名		本表計 施主 二三名		二 浦和市		数 住所 芳名	
奉安数 一〇、〇四九体		総合計 施主 四、〇三六名		本表計 施主 二三名		一 渡辺 きみ		数 住所 芳名	
<p>お勧め</p> <p>「先祖さまが観音さまのみ座の中に安らいでおられるお姿に、深く心が打たれるとされて、次ぎつぎに奉安がいただけました。</p> <p>厚く御礼申し上げます。</p> <p>どうぞお関係の向きなどよろしくお勧め下さいますようお願い申し上げます。</p> <p>※一体につき 二万円</p> <p>※電話でも受付いたします。</p> <p>電話 〇四二九七―九―〇四一七</p>									



写経奉納者芳名

自 五八・三
至 五八・九 敬称略

数	住所	芳名	数	住所	芳名
三〇〇	川島町	関 八朗	一〇〇	川崎市	山崎 和枝
二	杉並区	野崎 直澄	五	江東区	田島 洋子
二	狹山市	細田 直治	二	横浜市	坂井 ゆき
一	新宿区	松沢みつ子	三	市川市	岡田 千代
一	浦和市	吉本 君代	一	渋谷区	宮本 和美
二	東村山市	萩原 明	本表計		
三〇	平塚市	三田 節代	施主 一五名		
五	中野区	鈴木 翠	奉納数 四六五卷		
一	川口市	高田 ふみ	奉納総数		
一〇	昭島市	井上 さと	施主 三、一七一名		
			奉納数 一二、二二三卷		

観音さまのお救い

渋谷区 有末 文江

この夏お隣りに出火があり、火の手が早くてどうすることも出来ず、ただ仏壇から観音さまを持出して一心にお救いを念じたのでございました。僥倖にも類焼は免かれ、動転した気持ちもまだおさまらないまま仏さまを仏壇にお戻しましたところ、家の中は水びたしになっていますのに、観音さまのお供え水はスッカリ乾いて一滴もなくなっているのです。毎朝お器にお供えするのにどうしたことであろうかと、お友達の方にお話ししたところ、それはキット観音さまがご自分のお水を増されて、火を防いで下さったに違いありませんとおっしゃられるのでございました。その時、新盆に鳥居観音のお塔婆法要にお詣りした時、和尚さまが、仏さまの念力によって一粒のお米が、川砂の量よりも増して、大勢の方々には接待が出来たというご法話が、走馬灯のように、頭を走ったのでございました。一層信心を深くさせて戴きます。

鳥居観音詣で

飯能市

岡 治 代

鳥居観音の秋の大祭に併せて、一万体観音満願法要の案内状が届いたので是非代理として参拝してほしいと、母からの依頼である。

丁度紅葉も真っ盛りで見頃であろうし、一人ではつまらないだろうと、お友達と一緒に付合ってくれました。当日はどんよりとした曇り空でしたが、三十分程名栗溪谷を遡ると山頂に白亜の大観音像（三十三米）が美しい姿を見せてくれます。二十万平方米の山々に祀られている百余の仏像や莊嚴物の殆んどが開祖平沼先生のお手によるもので、仏像も裏山の大檜の一木彫とのことでした。

法要は午前十時半より本堂で行われ、そのお席で平沼氏は、「お蔭様で開創以来四十年を越え……往時を省りみて感慨無量」とおっしゃられ、鳥居観音を創ることの二つの悲願を話されました。その一つ

が御母堂様の遺言で観音様をお山にお祀りすること。お祀りした観音様との間に巾広い御縁結びの仲立ちをしたい——これが第二の宿願で一万体観音の奉安であったとお話しにられました。

無心で刻み、植樹し、今年九十一歳になられた先生は、悲願を達成なされたお歡びをにこやかにされ合掌なさいました。緋の衣に金色の帽子と袈裟をまとわれた方丈様も開祖の偉業と満願を称え、溢れ落ちる涙を拭おうともせず、感涙に咽びながらご講話なさいました。

更に十一時半頃からは、頂上の大観音の中で法要が営まれ、円形の内壁は一万体観音が整然とぎっしり並んでおりました。このほか堂内には、正面に阿弥陀如来、三十三観音、薬師如来、十二神将、吉祥天、不動尊等が見事に祀られていて、灯明に照らされ光と影が織りなすさまは神々しいばかりでした。

私達は帰りは歩いて下だることにしました。雨上りのしっとりとした道の両側には、一米の間隔に満願供養幡（七尺×一尺）が建ててあります。途中、

玄奘三蔵塔に立寄り、ら旋階段を昇ってみました。この建物は、一層は四角型（日本様式）二層は八角（中国様式）三層は十六角型（南方様式）という混合建築で、他に例がないそうです。

外が一寸にぎやかになり、出てみると平沼先生御夫妻が裏庭に立っていらっしやいました。どなたかご挨拶をされたので、私もおそばに行き「母が来られないので代りに参拝させていただきましたき有難うございました。」と頭をさげました。先生は「お母さんはどちらにお住いですか、おいくつですか。」とおっしゃられ、「私は九十一歳になりました。私が植えた樹もこんなに大きくなりました。ここは四季それぞれに美しい、いい所です。道も良くなりましたから車で上まで登れます。どうぞ春にでもなったら又連れておいでください。」と、「握手をしましょう」と、にっこりと気さくに二人に握手して下さいました。あの観音様をこの手で創られたのだなあと思うと温もりが心の中まで伝わってくるような気がいたしました。そして「写真も和やかな方がいいから、握

手でもしているところを一緒に撮りましょう」と御一緒にカメラに向われました。明るく大らかな御夫妻に、ほのぼのとした暖かさを感じました。お付きの方に厚かましくも写真をお願いしておくと、後日送ってくださり良い記念となりました。

塔の真下まで下った時、空が明るくなり、前方の山間の霧が流れはじめて墨絵のように美しく、眼下に広がる紅葉はこれとは対象的に色あざやかに燃え、"きれいな" 思わず口を次いで二人共立ち止まりました。そして次の瞬間、「あつた！」私のすぐ目の前に母の住所と名前が書かれた奉納の幡が僅かな風にゆれていたのです。なにしろ一万本もある幡ですから、気にも留めず歩いていたのに、偶然にも目の中に飛び込んでくるなんて驚きました。不信心の私でも「これが観音様のご利益というものかなあ」とつぶやいてしまった次第です。にぎやかな法要も終り、山は又静寂なたたずまいとなり、紅葉の美しい昼さがりのひとときでした。

鳥居観音だより

開祖平沼先生ご夫妻の動静

先生は九十二歳を迎えられ、米寿のとみ夫と共に健康にご留意されながら、お揃いでお元気でいられ、毎月の本尊さまへの参拝を楽しまれます。



昨年秋の一万体観音の満願が第二の悲願達成であられただけに、何にかえない欲びだったとされ、報謝のため染筆一万枚にご精のであるご日常でいられます。

三月



○三日は桃の節句、雛まつり、昔は折紙で雛を作り川に流して女の子の災厄を払いました。

○二十一日はお彼岸のお中日、寒さもこの彼岸を境として温和な、しかもはれやかな季節を迎え、七日間を彼岸会として法要やお墓詣りが行われ、仏さまには牡丹餅をお供えて皆さんでおさがりをいただきます。

秋にはおはぎ(萩餅)といって季節の呼び名がつきました。

○鳥居観音では中日、観音講中の先祖さま並に戦没者の追悼供養が行われました。

○主なる参拝

一日 日高町、野村浄さまご祈禱。

三日 比企郡川島町、関八朗さま写経百卷奉納

山形県鶴岡市、孫谷孝美さまご祈禱。

四日 山形県東根市、岡田英子さま、福田進一

さまご祈禱。

一三日 墨田区、五十嵐庸泰さま、ご奉納。

〃 世田谷区、須永祥三さま、ご奉納。

一八日 入間市、中村敏三さま、ご奉納。

一九日 新宿区、鈴木一枝さま、松沢みつ子さま

ご祈禱。

二〇日 入間市、吉田健さま、大金さま、相内さ

まご奉納。

〃 国分寺市、佐藤さま、ご奉納。

〃 飯能市、伊藤善治様さま、ご奉納。

二一日 飯能市、吉島宏子さま、一万体観音ご奉安

〃 新宿区、生方光雄さま、ご祈禱。

二二日 日高町、小谷憲成さま、ご供養。

〃 世田谷区、平沼花子さま、ご奉納。

二四日 開祖平沼先生夫妻、ご参拝。

二六日 バス四台、団体参拝。

二七日 平沼清儀さま、塩野治平さま、ご祈禱。

〃 国分寺市、佐藤さま、ご祈禱。

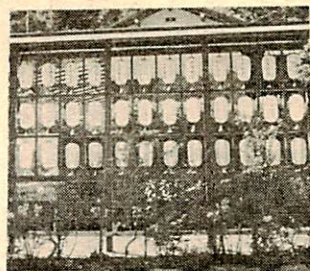
二九日 バス三台、団体参拝。

三〇日 蕨市、小松商事さま、ご奉納。

四月

○春季例法要

十七日恒例の春の法要。当日は連日続いた雨模様の中で朝来村内梅花講中（ご詠歌衆）の上山に続いて、川越の斉藤講中五十三名さま他多数の参拝を得、定刻十時半本堂に於て法要厳修。席上開祖平沼先生から昨秋の一万体観音満願達成を謝された後、尾尻老師の法話があつて山頂大観音の法要に移り、慇懃裡に滞りない一日でした。



参道の祝灯

○主なる参拝

- 一日 飯能市、竹田重次郎さま一万体観音奉安
- 二日 坂戸市、梶啄和子さまご祈禱。
- 三日 神奈川県大和市、柏木伊助さまご祈禱。
日曜日で参拝多く、自動車一五〇台以上
- 七日 山形県東根市、岡田英子さまご奉納。
- 八日 開祖平沼先生夫妻ご参拝。
- 〃 横浜市、坂口文子さまご奉納。
- 一〇日 狭山市、六本木初代さまご奉納。
- 〃 豊島区、小川勘兵衛さまご奉納。
- 一二日 大宮市、松沢邦子さまご奉納。
- 一四日 八王子市、寺島武夫さまご奉納。
- 〃 名栗村、岡部宣孝さまご奉納。
- 一六日 狭山市、六本木初代さまご祈禱。
- 一八日 世田谷区、荻原寛子さまご奉納。
- 二〇日 三鷹市、田中友紀子さまご祈禱。
- 二一日 新座市、城島千津子さま、飯能市、川口
深美さまご供養。
- 二三日 川越市、関本正一さま一万体観音ご奉安

二四日 飯能市、平沼玉枝さまご奉納。

〃 上尾市、升田吉重さま供養幡ご奉納。

二六日 新宿区、鈴木一枝さまご奉納。

二八日 日高町、後藤カツさまご祈禱。

〃 日高町、野村浄さまご奉納。

二九日(天皇誕生日)(山内つつじ八分咲き)

終日参拝者で賑う、自動車二五〇台超す

〃 台東区団体参拝、本堂で法話。

〃 台東区、清野フサノさまご奉納。

三〇日 川口市、藤本良吉さま一万体観音ご奉安

五 月

〇五日は菖蒲の節

句。尚武の語呂に

合わせて男児の祝

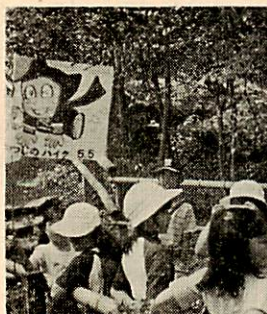
い日とされ、戦後

は「子供の日」と

してその成長を祈

られます。

子供の日



幟りには武者絵や鍾馗さんのものがあって、丈夫にあやかり、鯉の吹き流しは出世魚といわれて大空に泳ぐ健やかさは、青葉五月にふさわしく清々しい。

鯉幟り、空に泳いで初節句

○鳥居観音のお山は、四月終り頃からつつじの花盛りとなり、お天気にも恵まれ、特に飛石連休から続いて家族連れで大変な賑いでした。

○主なる参拝

一日 家族連

れ参拝多し。

横浜市、星野清さ

ま一万体観音奉安

二日 警察機

動隊六十五名参拝

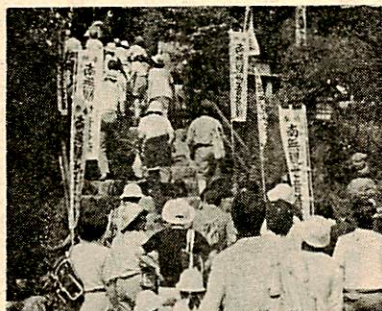
其の他参拝多し。

三日 (憲法記

念日) 参拝多く、

自動車二〇〇台を

超える。



子供の日

四日 開祖平沼先生ご参拝。

五日 (子供の日)

天気良く朝から子供会など多数の参拝。

終日大変な賑い。自動車三〇〇台を超す

内田孝子さま、松沢孝一さま、河野哲郎

さま、高橋明人さまご奉納。

六日 飯能市、小川文雄さまご奉納。

富士見市、加藤啓仁さまご奉納。

七日 浦和市、中田里枝さまご祈禱。

川越市、関根清一さま供養幡ご奉納。

八日 (母の日)

家族連れ参拝多し。自動車一七〇台。

新座市、城島千津子さま、飯能市、川口

深美さま、亡母のご供養。

一〇日 練馬区小竹町老人会、保田勲夫さま一行

団参。本堂で祈願を行った後、尾尻老師

より「世の先達としての自覚と信仰」に

ついて法話があり、一同庫裡で四方山に

懇談されて下山。

六月



○主なる参拝

三日 平沼先生ご参拝。

四日 板橋区、植村せつさま仏像入仏開眼。

〃 埼玉師範学校、昭和七年卒業者二十五名

参拝。本堂に於て尾尻老師より「鳥居観音の縁起」と「今生の宿縁」について法

話があり、全山を拝して下山。

五日 新座市、城島千津子さま、飯能市、川口

深美さま亡母のご供養。

〃 狭山市、六本木初代さまご祈禱。

七日 三鷹市、伊東義雄さまご奉納。

〃 秩父市巡礼団体ご参拝。

一二日 北区、山崎安子さまご奉納。

一八日 千葉銚子市団体ご参拝。縁起法話。

一九日 秋田市、石塚清四郎さまご奉納。

二五日 東京、中外日報社（佛教新聞）より鳥居

観音の取材に上山。飯能市井上様の紹介

二一日 東京目黒区、今井豊子さま（琵琶師）ご一

行団参。本堂で祈願された後山頂大観音

を参拝。尾尻老師の縁起と法話の後、下山

一五日 狭山市、細田直治さま一万体観音ご奉安

一六日 比企郡川島町、関八朗さま写経百卷奉納

一七日 清水健生さま、吉田穎章さまご奉納。

二〇日 鴻巣市、吉田穎章さま、仏像入仏開眼。

〃 パス五台団体参拝。

二二日 清水市、松田江畔先生ご一行（青鋒会書

道会諸先生方）五十三名研修会参拝。

〃 世田谷区、大竹祐二さまご祈禱。

二三日 新宿区、生方重子さま、相内文一さま、

大金悦子さま、広瀬さまご奉納。

二四日 立川市老人クラブ団参。尾尻老師法話。

二五日 松丸勝重さま、北河和平さま供養幡奉納

二六日 飯能市、和田侑子さま一万体観音ご奉安

〃 日高町、中沢弘一さま一万体観音ご奉安

二九日 大宮、浦和より団体六〇名参拝。

三一日 入間市、佐々木よしさま一万体観音奉安

二八日 日高町、小谷憲成さま一万余体観音ご奉安

三〇日 豊島区、安部辰也さま一万余体観音ご奉安

〃 調布市老人クラブ団参。

鳥居観音の縁起と観音信仰について法話

開祖平沼氏の深い信仰に感激されて下山

七月



〇卒塔婆供養

十六日は「送り盆」、山頂の大観音堂内で卒塔婆
法要厳修。

東京方面からの

参詣もあり、塔婆

供養のいわれと功

徳について法話。

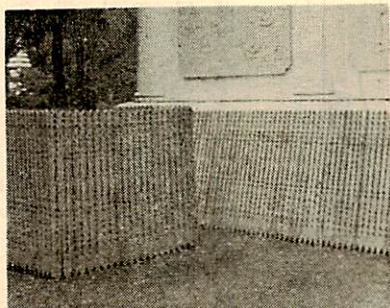
塔婆は法要後堂

外に樹てられ、仏

さまへのお使いを

していただきま

す。



〇主なる参拜

三日 東久留米市高橋芳美様一万余体観音三体納

四日 狭山市、内藤美幸さまご祈禱。

五日 名栗村、柿沼洋治さま供養幡ご奉納。

一〇日 新座市、城島千津子さま、飯能市、川口

深美さま亡母のご供養。

〃 日高町、中沢弘一さま、飯能市、和田信

子さまご奉納。

一一日 三鷹市、本村そのさまご奉納。

一四日 比企郡川島町、関八朗さま写経百卷奉納

一五日 越生町、小森茂さまご祈禱。

一六日 青梅市、富田秋夫さまご奉納。

〃 飯能市、平沼玉枝さまご奉納。

〃 三鷹市、松井吉雄さまご奉納。

〃 入間市、吉田健さま、大金さま、村田さ

ま、生方さま、原さまご奉納。

一七日 新宿区、米川梅吉さま一万余体観音ご奉安

〃 河野妙子さまご祈禱。

一九日 神奈川県大和市、柏木伊助さまご祈禱。

二四日 新座市、城島千津子さま、飯能市、川口深美さま亡母のご供養。

二六日 開祖平沼先生夫妻ご参拝。

二七日 入間地区教育長OB会ご参拝。

本堂で「鳥居観音の縁起と信仰」法話。

伊奈町、加藤さえ子さま一万体観音二体

ご奉安。

三〇日 渋谷区、田村うめさま一万体観音ご奉安

八月



○流灯供養

鳥居観音では毎年、月おくれの十六日（送り盆）に流灯法要が行なわれます。

川や海に流すことで公害になるといわれる向もある中で、当山の行事は年々盛んになってまいりました。天候にはいつも気遣いすることですが、今年は特に数日来の台風模様で、当日は生憎の荒天候となり、大変皆さんにご迷惑をおかけしました。

参拝バスも大半中止される中で、板橋区大山講中

の五十名さま、所沢の小山講中をはじめ、篤信者多数のご参拝があり、仏前に供えられた灯籠舟千数百隻五色の施餓鬼幡に飾られたもとの、満堂のお施主と共に盛大に法要が修されました。

法要後、開祖平沼先生から御礼のご挨拶があり、尾尻老師より盆供養の意義と先祖の鴻恩に対する自覚について法話があり、一同夕刻の下山。

名栗川は氾濫して流灯出来ず、仏さまにはそのまま灯籠舟で、ご浄土にお昇りいただきました。

流 灯 法 要



○主なる参拜

九日 堀沢幸正さま他参拜ご奉納。

一二日 新座市、小池富士雄さま一万体観音奉安

一六日 茅ヶ崎市、片岡祥子さま一万体観音奉安

〃 板橋区、森惠美子さま一万体観音ご奉安

一九日 板橋区、植村せつさまご奉納。

二三日 小金井市、吉田竹利さま一万体観音奉安

〃 所沢市、西村安夫さま一万体観音ご奉安

二八日 飯能市、岡秀俊さまご奉納。

〃 青梅市、浜野土木さまご祈禱。

〃 飯能市

小沢良

助さま

ご奉納

三〇日 入間市

五十島

テル子

さま塔

婆供養



要法灯流

九月

○主なる参拜

六日 横浜市、坂口文子さまご祈禱。

八日 所沢市、石井三平さまご祈禱。

一〇日 豊島区、小川勘兵衛さまご奉納。

一二日 新宿区、芳野和子さま一万体観音ご奉安

新宿区、大金悦子さまご奉納。

一三日 開祖、平沼先生ご参拜。

〃 狭山市、宮岡伴吉さまご奉納。

一五日 新座市城島さま、飯能市川口さまご供養

一八日 東大和市、松野翠さま水子供養。

二一日 入間市、山田三郎さまご祈禱。

松戸市、加藤はるさまご祈禱。

二二日 所沢市、内野保さま仏壇位牌入仏供養。

二五日 開祖、平沼先生夫妻ご参拜。

三〇日 浦和市、武内俊夫さま一万体観音ご奉安

〃 保谷市、渡辺きみさま一万体観音ご奉安



○これからの行事

○十二月十日 大黒祭

平沼先生が刻まれた大黒さまは、四百数十に及ぶといわれますが、その最後にご本尊として彫られたものが、現在本堂の左脇にお祀りしてあります。

商売繁昌、福德の神さまとして、親しまれます。

○十二月八日 釈尊成道会

お釈迦さまが、お悟りをひらかれた佳日です。

降誕会、涅槃会と共に、寺門の三大行事です。

○十二月三十一日 除夜の鐘

夜本堂でお経があがった後、十二時を境に、除夜の鐘が撞かれます。

谷を越え、里に流れる一〇八声、撞く人、聞く人……ともに迎える新年の幸を願うことです。

五十二年大鐘が建って以来、昭島方面、浦和方面からのお詣りがあり、初詣でに向かわれるご様子です。

○一月元旦 新年祈禱会 十時本堂で厳修。

年々ご祈禱の申し込みも増加し、着飾った参拝者

もみられ、川越の原田愛助様ご一行、飯能の平沼玉枝様ご家族、川越の斉藤恒作様ご一行、所沢の小山権之丞様など、毎年欠かせないお詣りで、お雑煮に賀詞交換などあつての下山です。

一般のご祈禱など随時お受しております。

(家内安全、商売繁昌、交通安全、病氣平癒、

入学祈願、その他)

○二月四日 節分会(豆まき)

お詣りの方々に、福豆を差し上げます。

○二月十五日 釈尊涅槃会

○三月二十日 春彼岸法要

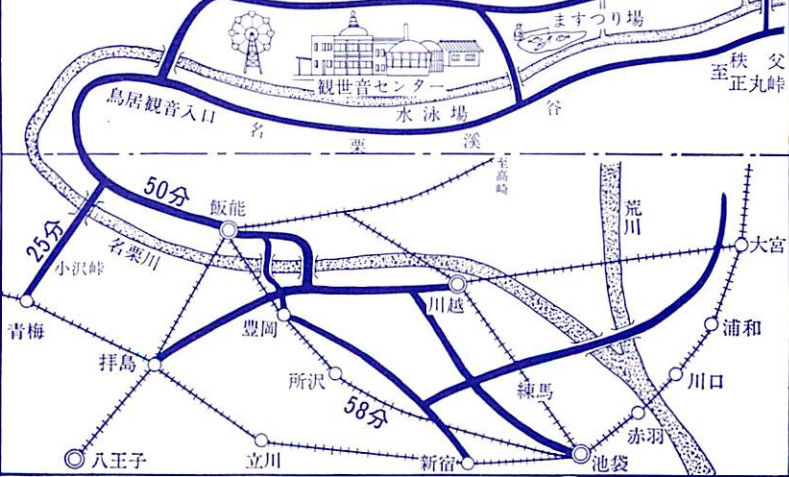
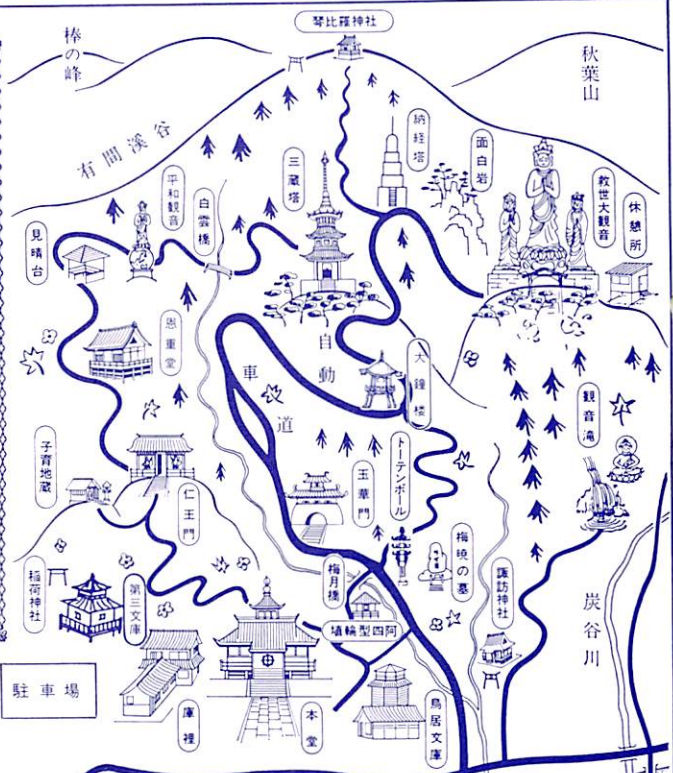
○四月一日より つつじまつり

○四月十七日 春季例法要

大勢さまのお詣りをお待ち申し上げます。

とりぬ	第五五号	発行日	昭和五八年十一月十七日
発行人	埼玉県入間郡名栗村	鳥居観音	平沼 宏之
印刷所	浦和市仲町二一八―十五	武州印刷株式会社	
発行所	鳥居観音	電話	○四二九七―九一〇四一七

白雲山 鳥居観音 観世者センター案内図



春の行事

○新年元旦祈禱 1月1日 10時

○春彼岸法要 3月20日 10時

○つつじまつり 4月1日～5月31日

萌える新緑の中に、つつじが紅を織りなします。

○春季大法要 4月17日 10時半

○あじさいと藤の花 5月～6月

○常時供養、祈禱申し受けております。

ご先祖・水子供養

家内安全、商売繁昌、交通安全、入学祈願など

○お山参拝
文庫見学 常時9時～4時半